

巻頭
言

また逢う日まで

| 会長 山崎 學



賛否両論ある中で9月27日、日本武道館において、故安倍晋三国葬儀がしめやかに行われた。14時から松野博一葬儀副委員長の開式の辞に始まり、国歌演奏、黙とう、故安倍晋三元総理の生前の姿が映し出され、安倍元総理自身のピアノ演奏による東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」がバックに流された。岸田文雄葬儀委員長、細田博之衆議院議長、尾辻秀久参議院議長、戸倉三郎最高裁判所長官による追悼の辞と続き、最後に内閣官房長官として7年8ヵ月にわたって安倍元総理を支えた菅義偉友人代表の辞で終了した。最後の菅元総理の辞の中で官邸生活での機微が紹介され、万感の思いで聞いていた出席者から大きな拍手が起きたのが印象的であった。続いて勅使・皇后宮使御拝礼、上皇使・上皇后宮使御拝礼の後に供花に移り、秋篠宮皇嗣同妃両殿下、佳子内親王殿下、寛仁親王妃信子殿下、彬子女王殿下、憲仁親王妃久子殿下、承子女王殿下の献花から始まり、外国から来日した多くの甲問客の後で一般による献花となった。混雑を避けて11時の開門と同時に入館し、受付で偶然に居合わせた櫻井よしこさんと隣席し、前席に着座していた横倉義武元日医会長と約3時間談笑しながら14時の開式を待ち、供花が終わってみれば17時半という長丁場であったが。献花の際に悲しみを耐え忍んでいた昭恵夫人に御挨拶して悲しみを共有できた気がした。

今回の国葬について野党をはじめとしてマスコミも国葬反対論を取り上げて世論の分断をおおりにあおった。国葬前日の26日、衆議院議員会館の大会議室で行われた安倍元首相の国葬を許さない会主催の国葬反対大集会では会場のひな壇に横断幕が掲げられ、迷彩服を着せた安倍元総理の背景に「やるな国葬、来るぞ徴兵、安倍賛美は改憲・戦争への道」と物騒な文言が書かれていたという。出席したジャーナリストの鳥越俊太郎は「安倍氏は日本を戦争に最も近づけた男。核に近づけようとした男。戦争犯罪的な恐ろしい首相だった」と暴言を吐き、経済評論家の植草一秀は「岸田内閣を葬り去る葬儀という形で（国葬）を執行させることが必要だ」と倒閣を呼び掛けたという（産経新聞10月4日 一筆多論）。両者とも過去に疑惑が取りざたされていたことを、世間は忘れても私は決して忘れない。このような輩が友人の安倍元総理を糾弾することは断じて許し難い。平成29年7月、東京秋葉原にて都議選の応援演説をした際に安倍元総理は聴衆から「帰れ」コールを浴びせられ、「こんな人たちに私たちは負けるわけにはいかない」と言い返し、マスコミは得意の切り取り作戦でこの発言を報じたが、発言の前に安倍元総理が行った「憎悪からは何も生まれない。相手を誹謗中傷しても何も生まれない」を報道することはなかった。習近平は中国4000年の歴史とうそぶくが、漢民族はその大半を東夷西戎北狄南蛮と馬鹿にしていた異民族に支配され奴隷として生きてきた歴史が長い。そのためか王朝が変わると前の支配者の墓を暴き唾棄するのが常だった。我が国では日露戦争での乃木希典将軍を例に出すまでもなく、敗者に対しては礼を尽くし、その霊についても丁重に扱うのが礼節ある日本人の姿である。

亡き安倍元総理を糾弾する輩には、おそらくこのような古来からの日本人の心性を理解することはできないのだろう。今回の国葬に対する騒ぎを見ていると死者に対する崇高な祈りもなく、死者を鞭打つ扱い方には合点がいかない。暑い中で一般献花に並んだ2万5,889人の気持ちを踏みにじるような一部マスコミ報道には心底馬鹿らしくて、腹も立たなくなった。朝日新聞はかつて「安倍の葬式はうちで出す」とほざいた。今度は朝日の番だ。